様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０９２６

研究課題名（和文）途上国の手工業研究の総合に向けた地理学的試み―既存研究の批判的整理と実地調査から

研究課題名（英文）Study on the Integration of Handicraft Studies in Developing Countries from a Critical Re-examination of the Existing Researches and New Field Surveys

研究代表者
吉田　雄介（YOSHIDA, Yusuke）

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：２０４６９２４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、史資料の乏しい途上国地域の手工業生産・産地を解明する方法を検討することである。第一に、途上国（特にイラン）の手工業研究の批判的再検討を行なうために、まずイランおよびオスマントルコ地域の手工業研究を事例に既存研究の批判的整理をおこない、既存の研究の問題点などを把握、指摘した。第二に、第一の作業をおこなった上で、イラン東部（ヤズド州を中心とする）をフィールドとし、聞取り調査や文書調査からは解明が難しいズィールー（手織りの綿製敷物）産地の歴史について現地調査を実施することで検討・考察した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is twofold. Firstly, it attempts a critical re-examination of handicraft researches in developing countries (especially Middle East) to identify the research obstacles. Secondly, it purports to conduct field researches in Iran to improve the existing research methods. I first review literatures and articles in the field of hand-weaving industries of Iran and Ottoman regions to explore new intellectual pathways for research. Then, I select a zilu (hand-woven cotton rug) from many hand-weaving industries in Yazd province and surround regions, Iran. I consider zilu itself as a useful means of obtaining information and examine the history of zilu production area which is difficult to obtain information from interviews and written sources.

研究分野：人文地理学

キーワード：手工業　イラン　産地研究　手織物　綿織物

１．研究開始当初の背景

イランに限らず、途上国の伝統的技術やそれに関連する知識は急速に失われつつある。それでも途上国の手工業（とくに手織物生産）は依然として地域を構成する重要な要素の１つであり、それは風土を背景に営まれる各地域の特性の発露と言えよう。

本邦では、地理学を中心とする産地研究（必ずしも手工業に限らないが）の相当な蓄積がある。ただし、途上国に関してはインドなどを除けば、それほど研究の蓄積があるとは言い難い。たとえば、代表者が専門とするイランについては、日本人による農村研究あるいはペルシア絨毯研究については古くから少なくはない蓄積があるが、絨毯以外の手工業に関しては研究がほとんどない。欧米の研究としては、芸術的な染織研究ないし遊牧民の物質的基盤である民具調査については豊富な研究が存在する。しかし、ペルシア絨毯を除けば、やはりイラン産地の具体的な研究は少ない。

また、現地の研究者による研究も不十分である。たとえば、イランの手工業・在来工業に関する既往の研究は、芸術的側面から捉る傾向が強いといった現地の研究者からの批判があるように、イランでは具体的な産地化の過程や生産の普及過程に注目する研究は乏しかった。これはイランの手工業研究のみならず多くの途上国地域に共通する事情であり、緊急の課題である。

途上国の手工業を研究する場合、日本のように組合資料や公的統計が整備されておらず、研究のための資料を獲得することが難しい。これは主として次のような理由からであろう。第一に、インフォーマル・セクターと包括される手工業生産は、政府や研究者の関心が乏しく、公的な統計や資料がほとんど作成されていない。第二に、生産者組合が組織されることが少なく、仮に組合が組織されたとしても活動が低調で会計帳簿の作成などがなされていない事例も多い。第三に、生産者自身も識字率が低く（特に、高齢者や女性）、文字資料を残さない。それ故、近年、日本人による途上国の手織物生産に関するモノグラフは増加しつつあるものの、こうした研究は主として聞き取り調査からデータを収集している。

２．研究の目的

途上国の手工業はその地域に根差した産業であり、地理学を含む多様なディシプリンにおいて実証的研究が蓄積されてきた。ただし、資史料やデータの乏しさもあり、それぞれ独自の研究手法に細分化している。

そこで本研究では、まず地理学を含む国内外の各分野の手工業研究で用いられてきた手法や資料・データの種類・入手方法を総括し、それぞれの長所と欠点を整理・分析することで、地理学研究においていかなる情報・手法が有用であるのかを再検討する。次に、実際にイランの手織物産地をサンプルとし、どのような資史料を利用することが可能なのか（逆に不可能なのか）を現地調査から解明することで、調査手法の理論化をこころみる。

また、途上国の手工業を研究するにあたり、聞き取り調査が情報獲得の中心となる。ただ、聞き取り以外にも、書き残された資史料としては、断片的であるにせよ残存する帳簿類、図案集などの利用が可能である。また、民具（他の用途に転用している廃材などを含む）自体の実測調査などを含む検討・考証も工夫次第では有効であろう。それぞれのディシプリンにおいて、研究者は乏しい資料をやり繰りして、あるいは切り口を工夫して実り豊かな分析になるよう努力してきたが、各分野で細分化したことも事実である。地理学における手工業研究をさらに発展させるためにも、ここで改めて、そうした手法を総括し、手工業研究の資料やデータの入手の限界と可能性を根本から検証してみる必要があると考えた。

３．研究の方法

(1)研究全体の設計

研究内容は次の２つのパートに大きく分かれる。第一は手工業に関連する研究手法の批判的再検討を行なうパートである。第二は実際に現地においてどのような資史料を利用することが可能なのか（逆に不可能なのか）を現地調査から解明するパートである。

(2)利用資料、現地調査

イランの手工業関連の書籍・論文の検索的な調査については、ペルシア語および英語、日本語資料を中心に利用した。

また、現地での手工業および手工業産地の情報収集のためには、平成 25 年度から 27 年度にかけ、イラン西部のチャハールマハール＆バフティヤーリィ州とその周辺諸州、およびイラン東部のヤズド州とその周辺諸州において現地調査をおこなった。ただし、イラン西部の遊牧民地域では、古い文書類および織物類の現存が乏しく、期間内では十分な調査が難しいことが判明したため、イラン東部の調査を中心とする方向に切り替えることを強いられた。

(3)研究成果の社会への還元について

上記(1)とは別に平成 25 年度から 27 年度にかけてペルシア絨毯を含む中東の絨毯コレクションで有名な白鶴美術館において、一般向けにミュージアム・レクチャーを実施し、最新の知見を含むイランの手織物に関する紹介をおこなった（2013 年 11 月 24 日、2015 年４月 26 日、2015 年５月 31 日）。

４．研究成果

上述の研究計画に即し、期間内に５本の雑誌論文を発表した（以下、丸数字は事項の〔雑

誌論文〕欄の記載に対応する)。内容的には上述の２つのパートにそれぞれ対応する。

(1)既存の手工業研究の批判的整理

最初に触れたように手織物・手工業は史料が乏しい。このボトルネックを何とか突破するために、研究手法の再検討をおこなった。具体的には遊牧民地域（イラン西部）の手工業研究の問題点の整理や、イランのみならず隣国オスマントルコの手工業研究・産地研究の批判的検討をおこなった。

①「イランの遊牧民の手織物生産研究に向けた試論」

本研究では、まず従来の遊牧民に関する研究および織物研究について概観した。イランの遊牧民に関する研究の多くは、人類学というディシプリンを中心とするものである。そのためこの種の研究では、部族社会の社会構造・政治構造の調査、あるいは家畜群の管理に関する調査が中心となる。製造・加工業についていえば、家畜群が生み出す生産物の加工の側面では乳製品への関心が高いものの、織物生産への取り組みには欠けることがわかった。

むしろ遊牧民の織物に関する研究は、熱心な愛好家や収集家を中心とするペルシア絨毯研究およびその隣接分野で積み重ねられてきた。ただし、この種の研究では、物が生産される現地の背景よりも物自体（作品）に焦点を当てるのが常である。そして、コレクションが古くなればなるほど、出自が不明確である場合が多く、生産の現場と作品の関係を考察することが困難となる。その結果、「時間」にかかわる問題が生じる。つまり、時間軸に沿って変化・変容を解明することが難しいのである。

別な問題点としては、関心が特定の手工業品に限定されるという点を挙げることもできる。たとえば、イランの遊牧民に関するセンサス類を検討したところ、販売用に限ればペルシア絨毯生産が中心となるが、販売用・自家用を問わなければ今でもさまざまな織物が生産されている。そして、これらは先にも述べたように従来の研究ではあまり触れられていない。また、イランの手工業協会の報告書などでも一部の手工業に限定される。

図１　遊牧民地域で製織されているアクリル糸製の紐

要するに、紐など現在でも盛んに製織されている手軽な製品については、ペルシア絨毯等に比べて取るに足らないものとみなされ、研究者の関心も関係当局の関心も乏しいと言える。［後掲のリスト上の雑誌論文⑤］

②「オスマン朝手織物生産の研究手法を再考する―イランの手織物産地研究のために」

イランの産地研究の可能性を探るための準備作業としてオスマン朝経済史の分野における手織物生産の研究手法の整理をおこなった。近年オスマン朝を対象とする社会経済史研究の進展はめざましく、手織物生産に関してもそれなりの数の研究があり、しかも欧米その他の新しい手法も大胆に取り入れており、イランの事例に対して重要なヒントが得られるのではないかと考えた。具体的には、オスマン社会経済史の主要な論者が英語で発表した研究を中心に、その関心と依拠する資料について検討した。

オスマン朝経済史研究は、古くからアナール学派を含めヨーロッパの新しい歴史研究の影響を強く受けてきた。また、1978 年に出版されたサイードの『オリエンタリズム』が主導した植民地主義や帝国主義を鋭く批判するポストコロニアル批評の影響を強く受けている。同様に、1980 年になるとオスマン史の世界システム論からの見直しは 1980 年代には普及した。経済史の分野では、プロト工業化論の影響も小さくない。そして、1980 年代に入ると先述の新しい影響を受けつつ社会経済史の分野で織物生産・産地に研究の関心が向けられるようになった。ここでは Faroqhi と Quataert の研究の足跡を検討した。なお、この２人に特に注目したのは、オスマン朝の手工業生産にこだわり比較的長期にわたり研究を発表してきた研究者は他にいないからである。

検討の結果、まず Faroqhi の場合は、16、17 世紀が主たる対象時期であり、アナトリア地方の都市部のみならず農村部でも市場向けの織物生産が盛んであったことが明らかになった。しかも、歴史的に各地で生産の変動があったこともわかった。また、毛織物や綿織物、麻織物産地などに産地の特化がみられ、それをきちんと図示したことも功績である。ただ、環境との関係で地域的な産地の特化が分析されていない点は残念である。

Quataert の場合も、19 世紀の状況を単なる「衰退」と捉えるのではなく、変化への対応として捉える観点が重要である。それゆえ、「手織物」と一括はできず、産地が異なれば、あるいは織物の種類が異なれば、受ける変化や変化に対する対応も異なることになる。そして、彼の手織物の衰退論批判は、イランにもかなり当てはまるように思う。ただし、世界システムに早くかつ深く組み込まれたオスマン朝と異なり、イランの場合は史料的な

制約があるように思う。

なおトルコとイランでは、ヨーロッパとのかかわりも異なれば、国内の産業構造や政治状況も異なる。しかし、以下のような点についてはオスマン朝の事例はイラン手工業、手工業産地研究の参考になると考える。

・中央集権的なオスマン朝にあっても、徴税やギルド関係の史料は豊富でも、手工業生産者の生活そのものを明らかにできる史料は乏しい。

・しかし、そうした史料の問題を乗り越えて、両者が主張したように、個々の産業・産地の発展ないし衰退、変化への対応は多様であり、産地により大きな差がみられる。したがって、有名産地の事例を一般化し「脱工業化、工業衰退」と即断することは危険である。

・各産地が経験した多様な変化や変化への対応は、ローカルおよび国内、国際的な政治・経済の変動や消費市場の動向、民族問題などが左右した。

・生産は自給用だけでなく市場向けにもおこなわれたのであり、産地をローカルやリージョナル、ナショナル、インターナショナルのそれぞれのスケールに置いて把握することと、そうしたスケール間のネットワークに位置づけて考察する必要がある。

・いわゆる「衰退論パラダイム」は近代の手織物のみならず、現代のわたしたちのものの見方をも強く規定している。これらの諸点は今を対象とする研究であっても参考になると考えられる。[後掲のリスト上の雑誌論文①]

(2)現場での調査・検討

まず初年度（平成 25 年９月）に遊牧民地域において手織物生産に関する聞き取り調査および現物の残存状況を調査した。その過程で、生活のなかで使用される手織物類は古いものは残存数が少ないことが判明した。また、現在も引き続き生産されている手織物も少なくないが、材質や用途が大きく変化し、今では古姿をとどめなくなっていることも明らかになった。同様に、遊牧民地域では文書類あるいは帳簿類なども残されておらず、それこそが遊牧民地域の産地の特徴であるといえる（平成 26、27 年度にも同様の調査を実施したが、同じような結果となった）。

図２ イスラーム暦 1223 年のズィールー（部分）

これは遊牧民地域だけでなく、ヤズド州を含むイランの各地でも同様である。そこで、苦肉の策として、手織物の中でも特殊な製品に頼ることにした。すなわち、綿製の丈夫な敷物であるズィールー（*zīlū*）である。

このズィールーはマスジェド（モスク）等に寄進されるその際に、寄進先や寄進年、職人名などの情報が織り込まれることが多い。そこでこの敷物の特性に頼ることで、産地の過去の状況を復元できないかと考え、現地のマスジェドやイマームザーデ（聖者廟）などを訪問し、使用中の敷物のデータを収集した。特に百年以上前に織られたもので、しかも職人の名入りのズィールーを中心に、敷物に織り込まれた情報を収集し、この３年間（平成 25～27 年度）で 100 枚以上のサンプルを観察することができた。このフィールドワークからは以下の成果が得られ、各々論文として公表（後掲のリスト上の雑誌論文②③④）ないし研究会等で報告した。

③「マスジェドにおける現在のズィールー(綿製敷物)の使用状況 ： イラン・ヤズド州メイボドおよび近郊の事例から」

まず、ズィールーという敷物の中心産地であるヤズド州において、サンプルとして十数ヶ所の祈りの場を選び、当該施設で現在使用されているズィールーを悉皆的に調査した。この結果、比較的最近に生産された敷物が多く使用されていると同時に、施設によっては二百年以上前に宗教寄進財として寄進されたズィールーが今でも使用されていることがわかった。明らかになったことを挙げれば、以下のとおりである。

・現在でも多様なズィールーが各地のマスジェドやイマームザーデで使用されている。しかも場所によっては、数百年前のズィールーと新しいズィールーが同じように使用されている。

・枚数自体は最近織られたズィールーが多いのはもちろんであるが、古いものも多く残る。ただし、18 世紀前半のものは枚数が少なく、イランの社会・政治的な混乱が生産にも影響を及ぼしたことが推測される。

・ただし、今日ではズィールーをそのまま使用している場所は少なく、ズィールーの上に機械織りカーペットを敷くことや、ズィールーを機械織りカーペットに置き換え、倉庫にしまっている場所が多い。

・他方、人目につかない場所ではそのままズィールーが敷かれていることが多い。つまり、２階や夏の部屋のことである。

・革命後、マスジェドの重要性が増し、マスジェドが大型化し、あるいはイマームザーデと一体で増設されたがため、イマームザーデにワクフされたズィールーがマスジェドの敷地で使用されるようになっている。したがって、必ずしも寄進した場所と使用する場

所は一致しない状況が生まれている。

・中心と周辺の差でいえば、周辺部で今も古いズィールーがよく残っている。他方、産地に近い場所では新しいズィールーの寄進が続いている。［後掲のリスト上の雑誌論文③］

④「文字情報・資料としてのズィールー(綿絨毯)：マスジェド・ハーフェズ・オ・ハージ・ゼイナルにおける事例から」

先の研究（③）において、現在使用されているズィールーからもある程度の情報が得られる目途がついた。そこで、このズィールーという手織物の特性を利用して、「ズィールー」というモノ自体を文字情報・資料として産地研究に利用できる可能性があるのか、仮にあるとすれば、ズィールーの文章を通じてその背後にある時代性や地域性の解明にどの程度資するのかを考察した。

具体的には、ズィールー産地の中心地といえるバシュニーガーン地区のマスジェドのひとつであるマスジェド・ハーフェズ・オ・ハージ・ゼイナルにおいて現在使用されている合計 45 枚のズィールーを対象にした（ここでは、西暦 18 世紀末に寄進されたものが１枚、19 世紀に寄進された６枚が今でも使用されている）。

ズィールーに織り込まれた一般的な文例を下に挙げれば、

وقف نمود　حاجی سلطان صلواتی فرزند حسن
ア　イ

بیاد مرحوم حاج سید هاشم میر محمدی فرزند سید حسین
ウ

این زیلو　بر مسجد حافظ بشنیغان
エ　オ

بیرون نبرند مگر برای تطهیر　سنه ۱۴۲۰
カ　キ

図３ ズィールーに織込まれた文の一例

のようになる。

最初に、(ア)「寄進した」旨が明記される。次に、（イ）寄進者の名前が入る。この事例では「ハサンの子ハージー・ソルタン・サラヴァーティー」となっている。さらに、（ウ）寄進の目的が入るが、この事例では「セイエド・ホセインの子故ハージ・セイエド・ハーシェム・ミール・ムハンマディーの記念に」と入っている。（イ）と（ウ）の人物の関係はこの文章からではわからないが、新しいものなので、住民に尋ねたところ、亡夫を記念して妻ソルタンが寄進したことがわかった（ただし、現在は夫婦共に故人である）。次に（エ）寄進物が明記され、この事例では「このズィールー」と入っているだけであるが、複数のズィールーを寄進する場合には、別に何枚を同時に寄進したかが織り込まれる。さらに、（オ）寄進先も明記され、この事例では「バシュニーガーン地区のマスジェド・ハーフェズに」となっている。ものによってはこれがさらに「靴脱ぎ」や「ミヒラーブ」「カーテン」など寄進場所や用途の細かい指定が明記されている場合もある。以上が基本的な内容であり、誰が、何のために、何を、どこに、寄進したのかが織り込まれる。

これらに加え、寄進財であることから、（カ）寄進の条件が入ることも多い。この事例では「持ち出しを禁ずる、洗濯以外には」となっている。最後に、（キ）寄進年が入っており、この事例では「1420（西暦 1999）年」となっている。寄進年は、イスラーム太陰暦（ヒジュラ暦）で表記されることが慣例であるが、年だけでなく月まで入る場合もある。なお、この事例には入っていないが、文章の末尾に、ズィールーを織った親方の名称が入る場合が多い。

このような情報が織り込まれた本マスジェドに寄進されたズィールーを検討することで、職人の生きた時代性やズィールーの寄進された地域の地域性についてズィールーから読み取り得ることを確認できた。以下に簡単に整理すれば、

・古いズィールーと新しいものでは、デザインやサイズなどに違いがあるだけでなく、文体にも違いが見られることがわかった。

・ズィールーに織り込まれた文章は定型的な文章である。基本的に短い文章であるが、特に古いズィールーや大型のサイズのものほど織り込まれた文章は長くなる傾向がある。

・寄進者はハージ、ハージーの尊称を持つ者が多く、裕福な者が多かったことがわかる。

・織り込まれた寄進の条件などから、地域内の他の施設との関係がわかりうる。

・ズィールーを織った職人の名前が末尾に織り込まれることが多いことから、サンプル数を増やせば職人の職歴が判明する可能性が高い。

もっともズィールーに織り込まれた定型化された短い文章は至って心細い資料であり、そこから地域性を知るには、より多くのサンプルを得る必要がある。［後掲のリスト上の雑誌論文④］

⑤「小さな寄進物 ：ワクフ基金から寄贈されたワクフとしてのズィールー（綿製絨毯）」

先の研究（④）において、ズィールーに織り込まれた文章の一般的な特徴を明らかにした。次なる本研究では、マスジェドに寄進されるズィールーの中で、ワクフのファンドを購入資金として寄進された特殊なズィールーを取り上げ、その特徴を検討した。具体的にはヤズド州の祈りの場に寄進された数十枚のこの種のズィールーの寄進年とその

織り込まれた文章内容を手掛かりに検討をおこなった。

先の一般的な特徴に加えて、本稿の対象とした種類のズィールーについても確認できた点を以下にまとめておく。

・まず、この種のズィールーは数が多くない。ただし、特定の場所には規模に関係なく小規模な施設にも大規模なマスジェド・ジャーメにも存在する。

・そして、特に定めのないワクフの収益から敷物が寄贈されることもあるが、大規模な施設の場合には、特定の人物のワクフが敷物購入の資金源とされ、継続的にズィールーが寄進されている。

・ワクフからの収益が少ない場合には、寄進枚数が減り、サイズが小さくなる可能性が高い。とすれば、ズィールーの寄贈状況は、毎年の農業生産や配水の動向の代理変数とみなすことも可能である。

・ズィールーに織り込まれた文章の特徴としては、購入資金源となるワクフについて誰が、何を寄進したのかが明記される。つまり、この種のズィールーにおいて最重要な点はこの内容にある。

・他方、ズィールー自体の寄贈者の名前については明記されない場合が多い。つまり、表記自体がない場合や「信者たち」という抽象的な表記が多い。しかるに、マスジェド・ハサンアリーやノーデシャンのマスジェド・ジャーメの事例に顕著なように管理者が自分の名前を含む一族の名前を詳しく記載する施設もあり、地域や組織差がある。このように管理者の個性や性格、あるいは場所や施設の違いを表記内容から読み取ることができる。［後掲のリスト上の雑誌論文②］

(3)今後の展望

当初は、途上国地域の手織物産地研究の新しい手法を生み出すことを目的としたが、手織物産地に関する情報の乏しさから現場でのズィールーのサンプルの収集に手間取り、手工業産地研究の理論面での貢献までには十分に進むことができなかった。ただし、特定の手織物に注目することで史資料の乏しさという問題に対応する一定の目途はついた。

この点を反省し、今後はズィールー産地の分析を進め、その上でこの事例を使って途上国の手織物および手織物産地研究の統合のための理論化を進めたいと考える。

なお、ズィールー自体の研究に関しては、今回は検討できなかったが、別な地域の施設に寄進されたズィールーやあるいは異なる種類（ワクフの収益を資金としてワクフとして寄進されたズィールーも存在する）のズィールーの比較・分析が必要になろう。また、ズィールーはワクフであることから、ワクフ研究の蓄積への参照も必要になると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①吉田 雄介、オスマン朝手織物生産の研究手法を再考する―イランの手織物産地研究のために、関西大学東西学術研究所紀要、査読有、第 49 輯，2016、pp.531-548 頁

②吉田 雄介、小さな寄進物 :ワクフ基金から寄贈されたワクフとしてのズィールー（綿製絨毯）、イラン研究（大阪大学外国語学部外国語学科ペルシア語専攻編）、査読有、第 12 号、2016、pp.119-139

③吉田 雄介、マスジェドにおける現在のズィールー(綿製敷物)の使用状況 : イラン・ヤズド州メイボドおよび近郊の事例から、関西大学東西学術研究所紀要、査読有、第 48 輯、2015 年、pp.229-247、http://www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/publication/asset/bulletin/48/kiyo4817.pdf

④吉田 雄介、文字情報・資料としてのズィールー(綿絨毯) : マスジェド・ハーフェズ・オ・ハージ・ゼイナルにおける事例から、イラン研究（大阪大学外国語学部外国語学科ペルシア語専攻編）、査読有、第 11 号、 2015、pp.224-241

⑤吉田 雄介、イランの遊牧民の手織物生産研究に向けた試論、イラン研究（大阪大学外国語学部外国語学科ペルシア語専攻編）、査読有、第 10 号、2014、pp.116-129

〔学会発表〕（計１件）

①吉田 雄介、マスジェドをアーカイブとして―寄進されたズィールーから読み取りうること―、イラン研究会、2016 年３月 26 日、大阪大学（大阪）

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　雄介（YOSHIDA, Yusuke）
関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員
研究者番号：２０４６９２４０